

「ジェンダー」は健在!!

今まで受け身の立場でしか行動できなかつた私は、積極的に仕事に取り組むようになっていきました。仕事を楽しくおもしろいと思うようになったのは、その頃からだと思います。ここでの5年間は、たくさんの人々との出会いや交流を経て、ネットワークを持つこと、チャレンジすること、チャンスを活かすことなどを体験から学び、私のエンパワメントに繋がったと思います。

その後、担当した仕事では、ジェンダーの視点で見ると矛盾だらけで違和感を覚えることが数多くありました。特に年金制度や戸籍制度などで今、大きな社会問題となつていきます。行政では、自分で仕事の担当を選ぶことはできません。私はライフワークとしてジェンダーの視点を活かした活動に取り組みたいと思うようになりましたが、それはこの職場での経験があればこそだと今更ながらに思います。

SEANとの出会いも、今も活動に参加できるのも「ジェンダー」との出会いがあったからです。

先日、高槻からの帰りの電車の中でこんな会話が耳に留まりました。

「〇〇はかわいくないねえ〜」

「あれはだめだよ。頭は切れるんだけど、あれではね〜」

「やっぱり女は花がないとね。あれじゃね〜」

「女は子どもを産むと強くなるよね」「ホント!ぐつと強くなりますよ」

忘年会帰りの男性の会話に、思わず耳を立ててしまいました。まだまだ巷では、ジェンダーは健在です。

「男女共同参画について学んだ者が、自分だけの学びにとどめず、自分の身近な周りから啓発の努力を続けていかないと社会は変えられない」

大野耀さん(財団法人日本女性学習財団理事長)の言葉ですが、ジェンダーの視点で社会の構造改革にがんばっていききたいですね。

記念コラム no. 3 (最終回)

子どもの権利条約2009★ 国連採択20周年 & 日本批准15周年

「子ども支援」の実践を!

少子社会の今、「子育て支援」の必要性が強く主張され、取り組みが広がってきています。しかし、「子ども支援」はどうでしょうか。「子どもの健全育成」の名の下、管理、所有と罰則の強化に姿を変え、かつて子どもだったはずの大人たちによる自虐的ともいえる主張におされ気味なのではないでしょうか。

人権教育の出前授業で、様々な年齢の子どもたちと出会います。子どもたちの様子から、地域の状況と親や学校関係者たちの価値観や関わり方によって、良くも悪くも子どもの状況は変化するのだと実感します。

一人ひとりの子どもたちを存在意義のある、かけがえのない人として、地域が、関わる大人たちが受け入れているかどうか重要なかぎです。「男の子だから」「女の子だから」「いつも手におえない子どもだから」と、レッテルを貼られ、あるがままの気持ちや存在そのものを否定される子どもたちは、自己否定に苦しめられたり、可能性を見失ったり、「どうせ自分なんか…」と自暴自棄になったりしていきます。

大人が無自覚でいると、不適切な関わりは綿々と引き継がれてしまいます。かつて子どもだった自分を抱きしめ愛しめる大人は、目の前にいる子どもたちのあるがままを受け入れ、その上で子どもの自己選択と自己責任を尊重した必要な教育やしつけを実施できるものです。

子どもの人権としての育ちについて、大人たちが学び、子どもから見た「強者」としての自覚を持つことから、今後もジェンダー視点で子どもの人権を核とした「子ども支援」を実践していきたいと思ひます。

子どもの人権としての育ちについて、大人たちが学び、子どもから見た「強者」としての自覚を持つことから、今後もジェンダー視点で子どもの人権を核とした「子ども支援」を実践していきたいと思ひます。

(文責:遠矢)